

序

貝澤哉

本書に収められた論攷はいずれも、一八世紀から二〇世紀初期にかけての近現代ロシア思想史を、「超越性」と『生』との接続」という視点から再構築することをめざす共同研究の一環として執筆されたものである。この共同研究の出発点となったのは、〈近現代ロシア思想に見られる際立った特質のひとつはおそらく、超越的でメタフィジカルなものを、あくまでそれとは対極的な身体、物質、言葉、つまり感性的・経験的な「生」との接点において見出そうとする強い志向にあるのではないか〉、という着想であった。

たとえばアレクサンドル・コイレは、著書『一九世紀初期ロシアにおける哲学と国民・民族問題』の冒頭で、ロシアにおける「哲学思想」の萌芽は一九世紀のスラヴ派以降に形成されたものであると指摘し、哲学思想の理念的・理論的形成が、ロシアにおいてははじつは、国民・民族^{ナシヨナリタイ}をめぐるフィジカルな具体的・歴史的動機と緊密に結びついていたことを示唆している。^① アンジェイ・ヴァリツキもまた、『ロシア思想史』の序文で、哲学思想の理論史というものは本来なら特定の国民・民族^{ナシヨナリタイ}の個別具体的な枠組みに収まるものではないはずだ、とあらかじめ断ったうえで、それでもあえて自著を「ロシア思想史」として読者に提示するのは、アカデミックで自律的な

学問としての普遍的な「哲学」理論の形成が、ロシアでは政治・社会的理由から一九世紀に入っても進まず、その結果当時のロシアの歴史的状况と具体的に結びついた「社会思想」と哲学理論との分離が困難だからだと述べている。つまり「ロシア思想史」の特徴は、「哲学」という普遍的・イデア的な一般理論を扱う領域と、近代ロシア社会に固有の国民化という具体的で歴史的・経験的な生のプロセスを包括する「社会思想史」とが不可分かつあからさまに結びついている点にほかならないというのである。

哲学的理念やその普遍的一般理論といった「超越的」なものと、具体的でフィジカルかつ歴史的な社会的「生」の個別特殊なあり方を峻別せず、むしろ互いが互いによって生かされるような相補性・相関性のもとに捉えるこうした傾向は、たとえば、個的・人格的なものの独自性を損なわない正教独自の宗教的共同性のあり方を指すスラヴ派の「靈的共同性」^{ソポルノスチ}理念から、一九世紀末のウラジミル・ソロヴィヨフにおける、理念的・理論的なものと経験的・個的なものの不可分の統一としての「全一性」概念を経て、セルゲイ・トルベツコイの提唱する「具体的観念論」や、ニコライ・ロスキークの「有機的・具体的なる観念実在論」、さらにパーヴェル・フロレンスキークの「具体的形而上学」や「宗教的唯物論」などへと装いを変えながら、二〇世紀初頭の宗教哲学思想のなかに鮮明な刻印を残している。

しかし忘れてはならないが、一見ロシア思想に顕著にあらわれているように思えるこうした傾向は、たんに偏狭な国民性・民族的独自性や、ドメスティックな社会・政治状況の反映にとどまるものではけつしてない。むしろ重要なのは、このようにロシア思想史を「超越性」と「生」との接続」という視点から再検討することによって、じつは「超越性」と「生」との関係にかかわる問いが、かならずしもヴァリツキが示唆するような、遅れたロシア国内の特殊な政治・社会的事情によってもたらされたローカルな問題意識だけでは説明できないことが明確になる点だろう。それはむしろ、近代の西欧や日本にも共通する哲学思想上の問いの大きな問題圏を形成しているのであり、つねにそうした世界的コンテクストとのかかわりのなかで思考されてきたはずなのである。

スラヴ派からソロヴィヨフやフロレンスキークにまで受け継がれた「超越性」と「生」との接続への希求が、そ

の背後に、超越的で不可知な「物自体」と、個人の意識主観の内的な「経験」の領域とを峻別するカントの認識理論や、それを基礎として発達した一九世紀の自然科学、心理学などにたいする根本的な異議申し立てを含んでいることは、いまさら指摘するまでもない。しかもこうした異議申し立てはあきらかに、ニーチェ、ベルクソン、デイルタイ、ジンメルなど、理論的認識に先立つ「生」の直観的世界把握を重視する「生の哲学」や、生きた主観の意識経験に、超越としての対象がいかにして形相や意味とともに与えられるのかを記述しようとしたフッサール現象学、またみずからも世界内を生きながら同じ世界内の事物や他者とかかわる現存在、すなわち生きた人間の世界内存在構造を説明しようとしたハイデガー、身体を持つ生きた行為者（主体）による世界（対象）への技術的・表現的な働きかけを超越と捉え、主体とはつねに超越の主体であると論じた三木清など、カント的理論性・合理性を「生」の視点から超越しようとした西欧や日本におけるさまざま試みと、大局的な方向性や問題意識を共有していたはずだ。したがって、ロシア思想史全体を、「超越性」と「生」の相関にかかわるこうした世界的コンテクストとの連関のなかで再検討することで、世界の哲学思想史のなかでのその独自の位置や果たした役割、理論的有効性について全面的に検証し直すことが可能となるはずである。

さらに注目すべきなのは、「超越性」を具体的・個別的な「生」へと接続することで、いわば不可視なものを物質的に可視化しようとする、ロシアの哲学思想に広く共有されている問題意識が、じつは「言語・記号」や「表象」、「イメージ」、「身体」など、今日のアクチュアルな思想状況や文化・芸術・社会理論等に欠かすことのできない重要なトピックについても、いまだにその有効性を失っていないように思われることであろう。というのも、〈超越的なもののはつねに物質的・感性的な姿形をとって直接的な経験のなかに現れる〉という確信は、たとえば、「意味」という一種アイデアのなものを音声や視覚的フォルム等個別の物質的形式によって具体化・感性化する「言葉」「記号」の問題や、美的な理念を感性的に造形化・具体化する文学や美術、映像等の芸術的「表象」「イメージ」の理論、さらに、「身体」というフィジカルで感性的なものを介した超越的他者（神や他の人々）との出会いや相関の具体的あり方（「対話の哲学」や「他者」「共同性」をめぐる宗教的・社会的存在論

等)の問題に直結するものにほかならないのだから。

実際ロシアでは、一九世紀半ばの言語学者アレクサンドル・ポテブニャ以降、言語の意味と音声形式との結びつきにかかわる問いに注目が集まり、とりわけ神と神の名の関係にかんする二〇世紀初頭の東方正教会での「**名**」問題と呼ばれる神学論争を契機に、フロレンスキー、アレクセイ・ローセフ、セルゲイ・ブルガーコフらによって、言葉自体をその意味や本質の直接的顕現と捉える存在論的言語思想としてさまざまに展開されたほか、ロシア象徴派の詩人アンドレイ・ペールイヤやヴァチャエスラフ・イワーノフも、本来不可知であるべきアイデア的なものが言葉を紹介して具体化・感性化されうる点に、言葉の持つ最大限の創造性を見出そうとした。より広い文脈では哲学者グスタフ・シペートやミハイル・バフチンなどの言語理論にも通底するこうした言語観は、言語記号と意味の繋がりをあくまで恣意的なものとしか考えないソシュールやクルトネの学説を受け継いだロシア・フォルマリズムなどに見られる機能主義的な言語理解にたいする根源的な批判となった。

またフロレンスキーやバフチンにとつては、言語と同様、造形的フォルムや視覚表象もやはり、単なる物理的客体・対象ではなく、他の人格や超越的存在者と接しつづ同時にそれを隔てる「境界・輪郭」として、身体の外観や顔の表情のごとき表現的対象であると理解されていた。彼らによれば、絵画や彫塑などの「イメージ」や「身体」の感覚的造形もけつしてたんなる似姿の再現表象や物的対象なのではなく、自己身体の境界の向こう側(つまり超越の側)からおとずれる、他の人格的な能動性や主体性の直接的表現 \parallel 働きかけにほかならないのである。こうしてみると、「超越性」と「生」との接続を希求するロシア思想特有の傾向性が、狭義の哲学思想の枠組みをはるかに超えて、「言語・記号」「イメージ」「表象」「身体」にかかわる文化・芸術・社会などきわめて広範で多様な分野の理論的基礎の探究にとつて、きわめて重要で本質的、原理的なアイディアやヒントをもたらしてくれるのではないかと期待できることがわかるだろう。「超越性」と「生」との接続という観点からロシア思想史を再構築することの現代的な意義や有効性は、まさにこうした点にあると思われるのである。

歴史的に見ると、ソ連時代には政治体制のイデオロギー的制約の影響下にあった近現代ロシア思想史研究は、二〇世紀末のソ連邦解体によって自由を得たかに見えたが、その直後に蔓延したのは、宗教やナショナルな文化伝統を前景化した「ロシア的理念」についての画一的で内向きの言説だったのであり、世界の哲学思想の幅広い歴史的コンテクストのなかで近現代ロシア思想の持つ意義や役割を冷静に理論的に取り出そうとする試みは、一部を除いてなかなか浮上してこなかったと言えるだろう。

しかし文化研究の分野では、すでに二〇世紀末に「民族文化」や「国民文学史・芸術史」の「伝統」を、「想像の共同体」(B・アンダーソン)を仮構する「創られた伝統」(E・ホブズボーム)と見る観点が登場しており、従来型の「国民文化史」「国民芸術史」「国民文学史」の研究は全面的な再検討を迫られて久しく、その意味では「ロシア思想史」もけっして例外ではなかった。B・グロイスは論文「西欧の下意識としてのロシア」(一九九〇)や「ロシアの国民的自己同一性の探求」(一九九二)のなかで、近現代のロシア思想が、つねに西欧の陰画⁴⁾に下意識を演じることで、逆にナショナルなロシアの独自性と優位性を確保する装置として機能していたといち早く指摘していたし、また最近では乗松亨平の『ロシアあるいは対立の亡霊』(二〇一五)が、一九六〇年代末以降の現代ロシア思想においても、こうした他者との差異化による「ロシア的なもの」の自己同一性の温存が図られてきたことを論じている。⁵⁾

こうしたなか、「超越性」と「生」との接続という視点から近現代ロシア思想研究の新たな枠組みを再構築するためには、すでに述べたように、まず「ロシア」という国民・民族^{ナショナルイデオロジイ}の文化伝統に基づく旧来の狭い解釈の枠組みから近現代ロシア思想史を解放し、同時代や現代の世界の哲学思想の主要な問題圏に広く位置づけ直すことで、その理論的有効性や独自の役割を検証すること、さらに、古典的な意味での「社会(政治)思想」の狭い枠組みを超えて、芸術や文学、法や政治、神学や宗教、哲学や自然科学、心理学や社会学、教育学などの多様な分野を視野に入れ、言語やメディア、イメージや表象、身体や知覚の様式、言説や制度やその権力的布置などの多様な視点から柔軟かつ領域横断的に対象を読み解いていくことが求められるだろう。

こうした要請に従って、本書に集められた論攷も、文学、教育思想、法哲学、教会史、哲学的他者論・人格論、科学思想など多彩な領域にわたっており、そこで扱われる素材や主題も同様に多様で横断的なものとなっている——一八世紀の詩人デルジャーヴィンの著名な頌詩「神」にあらわれた神の善性擁護のテーマと、その背後にある国際的な言説の掘り起こし、プーシキンの『エヴゲーニー・オネーギン』における、西欧的知性の哲学者チャアダーエフの隠れた形象化とその意味づけ、『カラマーゾフの兄弟』などドストエフスキの作品にひそむ、宗教と世俗の世界を巻き込む「包括」と「排除」のモチーフのはたす重要性、一九世紀の哲学者ユルケーヴィチの教育思想における宗教的「神化」のイデオと、そこで形而下的な肉体や近代的な物理的身体観が担う役割、一九世紀末から二〇世紀初期の自由主義法哲学者ノヴゴロツェフによる、新カント派法哲学の「自然法の復活」理論の受容の意味やそれへの反響、一九〇五年の第一次革命期における正教会の、国家による支配からの脱却の企てや、その背景にある国内外の異宗派との微妙なバランス関係、象徴派詩人ヴァチャエスラフ・イワーノフによるニイチェの「ディオニュソスのなるもの」の批判的読み換えの背後にひそむ、この詩人独自の实在概念の解明、バフチンの「他者」や「人格」の理論における独特な身体の方と、現象学や解釈学の世界的コンテクストにおけるその位置づけ、一九三〇年代における量子力学の確率論的性格や観測の不確定性の国際的な議論をめぐるソ連独自の反応の解明——これらはいずれも、「ロシア的理念」や「民族精神」独自の発展過程をあとづけることを主な目的としてきた旧来の「国民思想史」の枠組みには囚われない、世界的な思想・理論的コンテクストへの目配りや分野横断的なパースペクティヴをそなえた研究を目指して生み出された成果であり、本書によって、読者が既存のロシア思想史の常識的なイメージにとらわれない新しい視点や知見を少しでも多く獲得することができるなら、編者としてこれに勝る喜びはない。

【註】

- (1) Koïpre A. Философия и национальная проблема в России начала XIX века. М., 2003. С. 5-6.
- (2) Andrej Walicki, *A History of Russian Thought: From the Enlightenment to Marxism* (Stanford: Stanford University Press, 1979), p. xiii.
- (3) ロシア宗教哲学におけるの・トルネツロイの「具体的観念論」理念の重要性と、ロスキー、ロバーチン、フロレンスキーらの影響に「ついで」*Ермишин О.Г.* Князь С.Н.Трубецкой в истории русской мысли // *Соловьёвские исследования*. 2017. Вып. 3 (35). С. 46-55. を参照のこと。
- (4) См.: *Тройц Б.* Россия как подосознание Запада // *Тройц Б.* Утопия и обмен. М., 1993. С. 245-259; *Тройц Б.* Поиск русской национальной идентичности // *Вопросы философии*. 1992. № 9. С. 52-60.
- (5) 乗松亨平『ロシアあるいは対立の亡霊 「第二世界」のポストモダン』（講談社選書メチエ）講談社、二〇一五年。